［二〇二二年度大会シンポジウム］特集　人と動物のかかわりの思想史

犬に道ありや？——近世的「禽獣」観の中での賀茂真淵と曲亭馬琴——

板東　洋介

一　礼・禽獣・夷狄

近世日本では「人は万物の霊」という常套句のもと、動物に対する道徳的な優位性によって人間を位置づける言説が広汎に流布した[1]。この時、人にあって動物にない性質、すなわち人畜の別の基準は、仁義などの諸徳目・恩を知ること・欲望を制御することなど、文脈に応じてさまざまな点に求められた。しかし後々大問題を惹起したのは、この類の人畜論を権威づける典拠として機能した『礼記』曲礼上篇の経文が「唯だ禽獣は礼無し、故に父子麀〔牝〕を聚（とも）にす」と、その基準を「礼」に、しかもさらに限定して性規範に、求めていたことであった。ここで言及される鸚鵡や猩猩だけでなく、有徳の行為をなすと観念されてきた動物たち——「反哺の孝」をなす烏、「三枝の礼」をなす鳩、魚を祭る獺もみな、三芳野城長によれば「母子相通じ、兄弟相犯し、叔姪相交る」ゆえに「人に及」ばない[2]。

規範を逸脱した性関係を結ぶと人でなくなり、禽獣に堕するというこの観念を反復し、増幅したのは俗文芸である。そこでは近松門左衛門の『今源氏六十帖』（一六九五年初演）、『津国女夫池』（一七二一年初演）、河竹黙阿弥の『三人吉三廓初買』（一八六〇年初演）など、恋仲になった男女が、後に生き別れの兄妹と判明し、禽獣に堕したことを恥じて心中するというストーリーが定番化していた。こうして性規

範を逸脱すると禽獣に堕すという観念は知識層の占有物にとどまらず、広範な層に共有されていった。

さらに儒教ベースの人畜論でもうひとつ重要なのは、夷狄の観念と連動していたことである。朱子は夷狄を「人と禽獣との間に在る」[3]（『朱子語類』四）ものと位置付け、「利欲に志す者は便ち夷狄禽獣の径に趨くがごとし」[4]（『朱子語類』一二〇）とも述べる。荻生徂徠の「東夷」という自称が物議を醸したとおり、中華世界の東辺の島々で儒教を受容した人々の夷狄・禽獣に堕すまいという危機感には、なお切実なものがあった。こうして近親婚と禽獣と夷狄とが織りなす圏域は、まっとうな人倫の外部として俗文芸の世界で隠微な欲望を触発し続けつつ、固い道学の世界にあっては禁忌の領域であった。十八世紀の国儒論争があれほどに燃え広がったのは、この一触即発の問題圏に踏みこんだためであった。

二　犬をめぐる論争——国儒論争

近世最大級の論争である国儒論争の争点は、まさにこの人獣の別にあった。というよりも、儒教的礼制の渡来以前の上代日本は近親婚規制の秩序すら存在しない「禽獣」の世界であったという太宰春台の『弁道書』『聖学問答』の揚言が、このデリケートな論点にあまりにも忌憚なく触れたからこそ、「弁道書ノ板木ヲ打破リ度」[5]（湯浅常山『文会雑記』）と多方面に激烈な憤慨を巻き起こし、大論争を惹起したのである。春台の論拠は、記紀中に兄妹・叔姪間の婚姻が多く見られ、律令制の導入につれて払底する点にあった。対する国学者たちは「すべら御国の古へは母の同じき筋を誠の兄弟とし侍り、母し変はれば嫌はぬなり」[6]（賀茂真淵『国意考』）と、上代に明確な性規範が存在したこと、したがって日本人は「禽獣」でも「夷狄」でもないことを証明しようと古典を渉猟した[7]。

この論争のはしばしに見え隠れするのは、犬である。徂徠と春台は神道だけでなく、いわゆる武士道をも、あるべき「礼楽」とは異質な日本固有の習俗とみなしてその抜本的な改革を図ったが、彼らが範とした孫子が兵員を「群羊」に喩えた（『孫子』九地篇）のに対して、日本の武士は獰猛で自尊心の高すぎる「人くらい犬」に喩えられた[8]（徂徠『鈐録外書』）。

対する国学側でも、擁護されるべき日本古来かつ固有のエートスは、やはり犬に喩えられた。賀茂真淵は両陣営とも人畜の別を前提とする中で、「動物と同じで何が悪いのか」と論争のテーブル自体をひっくり返した点で、きわめて異色かつラディカルな位置に立っている。彼は儒教渡来

以前の上古の日本が、堅苦しい教えなしでも治まっていたありようを例示するために「たとへば犬の、其の里に多くて、他の里の犬の来る時は是をふせぎ、其友の中にては、くひもの・女の道につきては争へども、たゞひとわたりの怒にして、深くかまふることなきがごとし」（『国意考』一八頁）と犬を持ち出している。

こうして、儒者側にとっても国学者側にとっても、儒教渡来以前の具体的な日本のイメージはともに犬の群れであり、犬の道徳性をどのように表象し、どのように評価するかが争われたのである。

あまり注目されないが、真淵が説く犬のありようは、同時代の江戸特有の犬の生態を反映したものであったと考えられる。シーボルトは『ファウナ・ヤポニカ』哺乳類網で、近世日本の奇妙な人犬関係を次のようにしげしげと観察している。

通りごとに門で区切られた日本の街々では、地区ごとに犬が飼われ、特権を有した家族を形成している。この動物たちは特定の誰かの所有物ではなく、彼らが居を構えた通りの住人たちの共有に属している。彼らはその地区の守護者であり、激しく闘って隣の通りの犬たちの侵入を防いでいる。[9]

生類憐れみの令によって食犬・殺犬風俗が後退し、また綱吉没後のその緩和によって犬たちが中野の犬小屋からも解放された十八世紀の江戸は、犬の多い街であった。シーボルトの見る通り、そこでは町域ごとに、特定の飼い主をもたない犬が、町の人々から相対的に自立した相互扶助コミュニティを形成し、外からの別の群れの襲撃に対して共同で防衛に当たっていた。ここでは犬は人の家族の従属的な一員となるのではなく、よそ者とよそ犬とから地区を共同で防衛する「ヒトと犬との地縁集団[10]」が形成されていた。幕末以降次々と渡来した西洋人たちも、日本の犬の人間からの自律性や、よそ者への攻撃性を特筆している。[11] 真淵が論拠としているのは、まさにこのような犬の生態にほかならない。

仏教および儒教の世界観や倫理思想が依拠している自然認識が古典のままに固定され、アップデートされていないのに対して、国学や蘭学などの新興学派が経験的な新たな自然認識を提出し、その世界観自体の根本的な批判へといたるのは、須弥山世界説・天体論・言語論などに即して、十八～十九世紀によくみられた事象である。この真淵の犬論も、古典的な動物観を実地の観察によって覆し更新するという、近世中後期に特徴的なこうした経験的自然認識の一例だったと考えられるのである。

三　浄められた犬――『南総里見八犬伝』

犬・道徳性・華夷観というこの問題圏に次に浮上するのは、曲亭馬琴の大作『南総里見八犬伝』（一八一四～四二年刊）である。この馬琴の代表作中では、人間の人間たる所以をなすはずの仁義礼智忠信孝悌の徳を各々体現した八犬士たちは、伏姫と妖犬・八房との間に生まれてくる。かつ物語の根本典拠自体が、作中で「援引事実」（第九回）として明示されるとおり、『後漢書』南蛮西南夷列伝の犬戎のエピソードであって[12]、性規範と夷狄観の連動という国儒論争上の最もデリケートな論点に直結している。他の俗悪な読本とは一線を画した「婦幼」のための勧善懲悪の稗史をもって自ら任じた大作は、実は「一種きわどい人獣同居譚[13]」なのであった。馬琴自身は、伏姫と八房の関係があくまで寓喩的でプラトニックなものであることを作品の内外で強調したが、匿名の『当世奇話』で「犬の胤が英雄と出現」する「人道滅却のものがたり[14]」とこきおろされ、春本『恋のやつふぢ』で露骨な交合の場面へと翻案されたように、当時の性規範と禽獣観のタブーに直に踏みこむ趣向であったことは否みえない。

馬琴の犬観は真淵とはまったく正反対で、かつ同じく独創的なものである。それはいわば、朱子学的な犬である。「淫婦」（第二回）玉梓の「児孫まで畜生道に導きて、この世からなる煩悩の犬となさん」（第六回）という呪いのもとに生まれた八犬士たちは、しかし伏姫や、大法師（ちゆだい）といった善人たちの道徳的な促しと献身とによって迫害に耐え、里見家と仁義八行とを守る忠義の犬として活躍する。「煩悩の犬」と「忠義の犬」という近世ごく一般的であった相対立する犬のイメージを、馬琴は朱子学の気質変化の理論によって統合し、善なる本然の性へと復した犬イメージを押し出しているのである。

本然の善性が欲望によって覆われ、外部からの触発によって発現する機を待っているという馬琴のこの動物観は無論、朱子学の人間観を動物に転用したものだが、一見したところよりもラディカルである。それは真淵とは違う仕方で、しかし同じく、人獣の別を論理的に無化しているためである。

四　犬観の衝突――真葛と馬琴

真淵の国学的な犬と馬琴の朱子学的な犬とは、只野真葛の『独考』への馬琴の批判的応答において、実際の衝突を見せている。

村田春海や清水浜臣ら真淵高弟の歴々と親交のあった真葛は、真淵の「天地のしらべ」の思考を継承し、世界を貫く「天地の拍子」から「たがひはつる」ために「聖人の道」など日本には不要だと喝破した[15]（『独考』上）。真葛もまた、人も鳥獣も虫もただ「勝劣を争（あらそふ）」のみで差異はないと述べている。

馬琴は彼女の才気と教養とは高く評価しつつ（『八犬伝』回外剰筆）、朱子学的立場から反論を試みる。その際引き合いに出されたのが、まさに犬の生態であった。

凡そ活けるものの勝負をあらそふは、天性にはあらず、みな慾より起るなり。譬ばあまたなる犬のうち、かさなりつつ臥したるときは、静にして一毫（つゆばかり）も慾念あることなし。これに魚の腸（はらわた）を投与れば、忽ちみだれ起て相争ひ、血をながし骨を折、強きはこれを奪ひ弱きは退きて、その争ひはじめて休（やむ）なり。[16]（馬琴「独考論」）

普段はのんびり共存している犬たちが、餌を見るや闘争をはじめることを例として、動物にも善にして静なる「天性」があり、それが欲望に覆われてしまうだけだというわけである。これは朱子学の人間観に基本構造を提供した『礼記』楽記篇の著名な一句「人の生れて静かなるは天の性なり、物に感じて動くは性の欲なり」を犬に当てはめたものだが、ここにも天理人欲（犬欲？）の相剋という構造に人獣の別を認めない馬琴の基本姿勢が露見している。外物に触発される前の「静」の境地とはふつう、嬰児の無垢、または居敬静坐の修為の果てに感得される閑寂な心性としてイメージされるものであって、それを犬がのんびりごろごろと寝転がってもたれあっているさまに見出すのは、馬琴の独創であろう。

五　犬ヶ島――『八犬伝』のラディカリズム

こうして未発の静の方向に犬の性善を見るのが馬琴であれば、已発の動の方向に犬の良知良能を見るのが真淵だといえよう。これはもちろん一面では禁欲的な朱子学と「うごく心」「人情」重視の古学・国学との間の、犬をだしにした代理戦争の一環ではあるのだが、実は一見したところよりも過激なのは、真淵よりもむしろ、馬琴のほうではないだろうか。

馬琴は、あらゆる生得的与件は、身分どころか種差すらも、後天的な徳の有無によって――より具体的にいえば欲望の制御によって、超克されると見ている。滝沢家が士分にとどまることを一生の悲願とした馬琴が創造した八犬士たちは、そのほとんどが下級武士～庶民層に生まれ落ち、悪人たちの迫害に耐えて、その「大団円」で各々国主に匹

敵する官位所領と、清和源氏に連なる名門里見氏の家臣にして勅許を受けた金碗の氏という、真のアイデンティティを手に入れるに至る。八犬士たちが示したのは、社会の周縁に生まれ落ち、前世の秘密の因縁と、その証の痣とを共有した僅かな同志たちとを支えに窮乏と迫害とを耐え抜く、ごく小規模な急進的セクトの姿である。「十一、二歳の頃」からの本書の愛読者であった渋沢栄一が、「農民とはいいながら……傍観してはいられない」と同志たちと謀って「目覚ましく血祭りになって世に騒動をひき起こす階梯となろう」[17]（『雨夜譚』一八七三年刊）と高崎城乗っ取り・横浜焼き討ちを企てたのは、尊攘運動の中でのその端的な露顕であっただろう。

しかも人獣の別に加えて『八犬伝』の中でもう一つ無化されているのは、華夷の別である。川村湊の指摘がすでにあるが、[18]里見家の所領である下総・安房二国は関東管領との合戦篇でその国境が強調されるとおり、諸河川や江戸湾で本州から切り離されてその東に浮かぶ島――つまり「東夷」の島とイメージされており、しかも「中華」にあたる本州のほうは、都も関東も管領の専横のただ中にある。

馬琴は『八犬伝』の前に源為朝が琉球に渡る『椿説弓張月』（一八〇七～一一年刊）を完結させ、また本作と同時に、木曾義仲の落胤による「島めぐりの条」[19]をその既刊部の末尾に予告した『朝夷巡島記』（一八一五～二七年刊、未完）を書き継いでもいた。後者も前者と同じく、道徳的な島、あるいは英雄によって道徳化される島の物語であっただろう。『八犬伝』の房総半島は、この系譜に連なる道徳的な島である。おそらく馬琴が『八犬伝』と『朝夷巡島記』の批評とその応答とをまとめて『犬夷評判記』と題して出版したのも、あえて意図した挑発的なネーミングである。馬琴にとって華夷を決定するのは島の相対的な大小や位置関係ではなく、徳の有無なのであった。はしなくも国儒論争中で市川匡が揚言した「人島畜生島の差別」[20]（『末賀能比礼』）を、犬の島でありながら「畜生島」ならぬ「人島」としての房総二国という、何重にもひねりを加えたかたちで『里見八犬伝』は描き出したわけである。

注

（1）この「人は万物の霊（霊長）」観については西田耕三『人は万物の霊――日本近世文学の条件』（森話社、二〇〇七年）八―三七頁、また塚本学『生き物と食べ物の歴史』（高志書院、二〇一一年）二五―三四頁に詳しい。

（2）三芳野城長『国意考弁妄』（『日本思想闘諍史料』第七巻、東方書院、一九三〇年）五五―五六頁。

（3）『朱子全書 修訂本』第十四巻（上海古籍出版社、二〇

〇二年）一八五頁。

（4）『朱子全書 修訂本』第十八巻、三七九〇頁。

（5）『日本随筆大成』第一期第十四巻（吉川弘文館、一九七五年）二〇七頁。早稲田大学所蔵服部文庫本によって「版本」を「板木」に改めた。

（6）『賀茂真淵全集』第十九巻（続群書類従完成会、一九八〇年）一一頁。以下、『国意考』からの引用は頁数で示す。

（7）春台の問いかけが、日本に固有の家族秩序・親族秩序が存在したかという宣長の問題意識へと繋がってゆく過程は、近年、河合一樹が注目するところである。河合一樹『大和心と正名――本居宣長の学問観と古代観』（法政大学出版局、二〇二二年）、特にその第一部第一章および第二部第四章を参照のこと。

（8）『荻生徂徠全集』第六巻（河出書房新社、一九七三年）六三一頁。

（9）Ph. Fr. de Siebolt, *Fauna Japonica*, Mammalia (Leiden: Lugduni Batavorum, 1833-50), p. 37. フランス語原文を私訳した。

（10）塚本学『江戸時代 人と動物』（日本エディタースクール出版部、一九九五年）二三五頁。

（11）同右、二三三―三五頁および仁科邦男『犬たちの江戸時代』（草思社、二〇一九年）六八―七三頁、二三八―四三頁に詳しい。

（12）ただし、後藤丹治によれば馬琴が実際に拠ったのは『太平記』巻二十二「畑六郎左衛門が事」に引かれた同様のエピソードである（『太平記の研究』河出書房、一九三八年、二一四頁）。

（13）高田衛『完本 八犬伝の世界』（筑摩書房、二〇〇五年）六五頁。

（14）何毎呉餡内『当世奇話』刊本上巻、八丁ウ（国会図書館蔵）。

（15）『只野真葛集』（叢書江戸文庫、国書刊行会、一九九四年）二六八頁。

（16）同右、三二〇―二一頁。

（17）渋沢栄一述『雨夜譚』（岩波文庫、一九八四年）三六頁。

（18）川村湊「馬琴の島」（『近世狂言綺語列伝』福武書店、一九九一年）一二六頁。

（19）『滝沢馬琴集』第十巻（本邦書籍、一九九〇年）三〇二頁。

（20）『本居宣長全集』第八巻（筑摩書房、一九七二年）一九七頁。

＊本発表の内容を「近世の論争」という観点からまとめ直し、論考「犬をめぐる論争――国儒論争における動物観の対立

と帰趨」（『日本文学研究ジャーナル』二五号、二〇二三年三月）として発表した。より詳細な書誌情報などはそちらを参照していただくようお願いするとともに、論旨・引用文献などに重複が多いことをお断りしておく。

（筑波大学准教授）